

「ありがとうございました。しあわせでした。」

のひと言を残して亡くなりました。

れんの一周忌をすませたころから、豊助は、だんだん元気をなくしてきました。きょうの見まわりも部下にまかせて、豊助はひとり、御用部屋ごようべやの柱にもたれていたのです。

うつとうしい気分をふりはらうように、豊助は磁石じしやくと書類をもつて立ちあがりました。かげったかと思うと、またさつと日がさして、お城の木々の若葉がきらきらとかがやき出します。

若葉の明るさに思わず目をそらして上をむいたとたん、豊助は、天守閣が頭の上から、のしかかってくるように感じました。豊助はたおれました。豊助はからだの中を用水路の水がさらさらと流れていくように感じ、そのまま気が遠くなくなっていきました。